

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和元年度病虫害発生予察注意報第1号について

このことについて、病虫害発生予察注意報第1号を発表したので送付します。

7月5半旬調査の結果、トビイロウンカの発生ほ場率が過去5年で最も高く、今後の気象条件からも多発が予想されます。

本年は6月30日から7月22日にかけて、断続的な飛来が確認されています。各飛来波の防除適期となる飛来後第2世代若・中齢幼虫期は、主飛来の6月30日飛来で8月17～21日頃と考えられます。

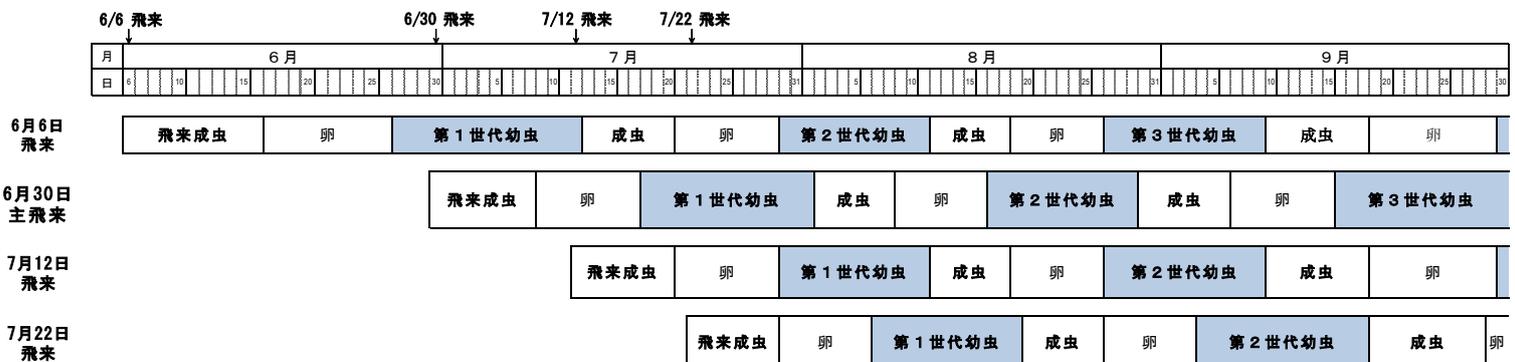
ほ場での発生状況を早急に確認し、適期防除の徹底について指導願います。

注意報第1号

- 1 対象作物：水稲
- 2 病虫害名：トビイロウンカ
- 3 発生地域：県下全域
- 4 発生量：平年・前年より多
- 5 注意報の根拠

(1) 飛来状況

予察灯とネットトラップ及び、JPP-NET（日本植物防疫協会運営）の「ウンカ飛来予測シミュレーションモデル」情報に基づくほ場調査より、飛来日を6月6日、30日、7月12日、22日と推定した（図1）。



(注) (1)発育零点12.0℃、発育上限温度28.5℃、発育停止温度33.0℃、有効積算温度(成虫期間100.0℃・卵期間109.4℃・幼虫期間189.4℃)
(2)気温はアメダス太宰府を使用(6月1日まで実測値、以降は平年値)。

図1 飛来に基づくトビイロウンカの発生予想パターン図(令和元年8月2日作成)

(2) ほ場での発生状況：7月5半旬（7月22～24日）調査結果より

- ・県内46の定点ほ場における10株当たりの払い落とし成幼虫数は、平均0.5頭で平年（0.3頭）・前年（0.0頭）よりもやや多かった（図2）。
- ・発生ほ場率は23.9%で平年（13.4%）の約1.8倍で、過去5年で最も高かった。
- ・トビイロウンカの齢期構成は若齢幼虫が中心であるものの、ほ場によって各齢期にバラつきがみられる。また、増殖力が高い短翅型雌成虫がほ場で確認されている（表1）。

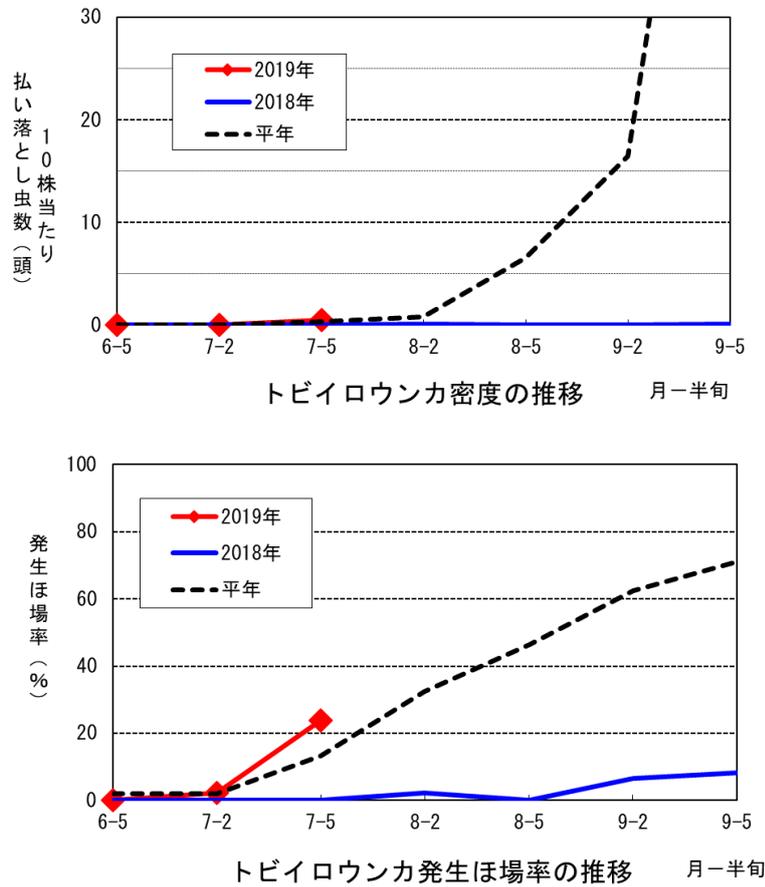


図2 トビイロウンカの発生密度と発生ほ場率の推移

表1 7月5半旬のトビイロウンカの齢期構成と短翅雌率（5月25日～6月26日移植水稻）

	雌成虫		雄成虫		成虫計	幼虫			幼虫計	成幼虫計
	短翅	長翅	短翅	長翅		若齢	中齢	老齢		
比率(%)	1.7	0	0	0	1.7	80	10	8.3	98.3	100
雌成虫の短翅率(%)	100	0	0	0						

(3) 今後の気象予報

福岡管区气象台が令和元年8月1日に発表した1か月予報では、やや多発生の条件になっている。

6 防除上注意すべき事項

- (1) 本種の発生量は地域・ほ場・移植時期で大きな差があるため、ほ場をよく巡回し、要防除水準を超えたほ場では早急に防除を行う。
- ＜要防除水準＞トビイロウンカ：中老齢幼虫の合計数
- ・飛来後第2世代： 100頭／100株（8月中～下旬頃）
 - ・飛来後第3世代：1,000頭／100株（9月）
- (2) 防除適期は発生予想パターン図（図1）を参考にして、齢期構成の調査から最適防除時期を決定する。
- (3) 防除に当たっては薬剤が株元まで届くよう丁寧に散布し、散布後に防除効果を必ず確認する。
- (4) 農薬の使用に当たっては、必ずラベルに記載された対象病害虫名・使用時期等を確認し、使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守する。
- また、ミツバチ・魚介類等の周辺動植物及び環境に影響がないよう、飛散防止対策を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努める。
- (5) 無人ヘリコプターによる防除を実施する場合は、気温が高くなる前の早朝に行う。
- 気温が高い時間帯に実施すると、薬剤の種類によってはイネの株元に到達する前に気化し、防除効果が著しく低下する場合がある。
- (6) 使用する農薬については「平成31年度普通作物病害虫・雑草防除の手引き（<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/bojonotebiki.html>）」を参照する。
- (7) 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>）を参照する。

